

費用を示したものと考へられる。かゝる記事は現存唐代に關する何れの地理書にも、余の知る限りに於ては示されて居るものなく、甚だ貴重な資料たるを失はぬと思ふ。ところでこの費用は何時のことに關するものであらうか、余はこれをもまた戸數や郷數と共に開元時代の調査に據つたものと見るのが穩當であらうかと思ふ。この書中には前述の如く大中四年の時代も記されてゐるけれども、各州縣の名の下に見える同一行中の戸數や郷數を既に開元二十八年の帳に據つたものと見る以上、これについても同様にかく認めるのが適當であらうと信ずる。

二、殘卷8行以下28行至る舊の鄯善・且末の地に關する記事が、沙州の條下に於てその屬縣の次に記され、唐代地志中の異例を作して居ることについては前に述べた如くである。實に元和郡縣志にしても、舊唐書の地理志にしても、殆んど全くこれ等の地については觸れるところ無く、僅に前者が沙州の位置を示したところに「西至石城鎮一千五百里」と記し、それがこの書に一千五百八十里と記して居ると略ぼ合致するものあるのみである。たゞ新唐書の地理志にはこれらの地方の四つが記され、その卷四十四州蒲昌縣の條下に

蒲昌中、本隸庭州、後來屬、西有七屯
城・弩支城、有石城鎮・播仙鎮

と見える。七屯城の七は衍字であること疑ないこの記事はこれらの二城二鎮が蒲昌縣に屬して居ることを示したのか、或は單に縣の西にこれが存在することを示したのか、明らかに斷定するには躊躇するが、何れにしても郡縣志や新唐書の説いてゐないところに及んで居るのは多とすべきである。併しながら少しく立入つて考へると、折角のこの記事も實は新唐書地理志編者の誤解からこゝに記されたに過ぎないらしく、その功績は單にこれらの地名を録したといふ點だ